



～読んで、感じて、伝えよう！～

2024 年度 入賞者作品集

2024 年度
読書推進プログラム
～読んで、感じて、伝えよう！～
入賞者作品集

もくじ

受賞者一覧	1
館長講評	2
受賞作品	
〔1等〕	
無知な自分を恥ずかしいと思って学んでいきたい 佐々木 愛梨 (心理カウンセリング学科4年)	3
無関心という名の罪 細谷 愛佳 (中国語学科2年)	6
〔佳作〕	
人生の終焉で 永山 琉海 (韓国語学科3年)	10

作品は原文のまま掲載しています

受賞者一覧

【1等】

佐々木 愛梨 (心理カウンセリング学科4年)

細谷 愛佳 (中国語学科2年)

【佳作】

永山 琉海 (韓国語学科3年)

【参加賞】

13名

館長講評

本学図書館の恒例行事である読書推進プログラムは、毎年年末にかけて全学生諸君を対象として開催される重要なイベントであるが、本年もまた例年どおり、多数の応募者が参加してくれたことに加え、各参加作品の完成度も全体として向上しており、本学学生諸君の学力レベルの向上を期待させる成果を見せてくれた。

このような喜ばしい状況を受けて、各学科からそれぞれの学問分野を代表するメンバーによって構成される図書委員会の委員全員が審査員となり、参加者名を伏した上で厳正に採点して得点集計を遂行した結果、最高得点の2作品が並ぶという史上初めての成果を見ることになり、ここに両者を1位とし、これに続く僅差の次点を3位として、その栄誉を讃えるものである。

特に、同点の第1位である細谷愛佳さん『無関心という名の罪』および佐々木愛梨さん『無知な自分を恥ずかしいと思って学んでいきたい』は、それぞれ若い世代の心情と現実世界との葛藤に悩む学生らしい信仰告白を率直に表現した良作であるが、これら両者に続く第3位の永山琉海さんの『人生の終焉で』も大変良い出来栄であり、上位両者との差は僅差であったことを明記しておきたい。

ここに、以上3名の優良なる作品を応募してくれた入選者諸君の快挙を讃えるとともに、今後も当イベントが引き続き盛況となることを願うものである。

新宿図書館長 石井貫太郎
社会学部地域社会学科・教授
法学博士

1 等

無知な自分を恥ずかしいと思って学んでいきたい

心理カウンセリング学科 4 年

佐々木 愛梨

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』新潮社
ブレイディみかこ著

この作品は日本でも近年話題にもなっている「多様性」「社会問題」を題材にしたノンフィクション作品だ。この作品を選んだ理由として、自分が「多様性」や「差別」を学ぶゼミに所属しており、自分の勉強になると単純に思ったからだった。だが、読み終えてみると、自分の知識や自分を取り巻く環境がいかに甘く、無知な状態だったと思い知らされた。この作品は先程説明した通り、「多様性」「社会問題」がキーワードになっていて、差別という社会問題が多く取り上げられている。そして、この差別は人種差別に限らず、貧困差別、ジェンダー差別など、多くの差別を表現している。このとき、私が思ったことは、多様性と差別は紙一重だということだった。多様性というものが広がり、世界に知られていくなかで、ある人たちは理解を示し、ある人たちは嫌悪感を抱いていく。これは良くも悪くも多様性が広まり、さまざまな形で見えてきた差別や偏見だと思った。

この作品は著者であるブレイディみかこさんの息子である「ぼく」がイギリスの白人労働者階級の人の子どもが多く通う「元」底辺中学校に通っている話である。そこにはハンガリー移民の親を持ち、親から無意識のうちに差別用語を刷り込まれ、人種差別丸出しの「ダニエル」や貧しく食べるものがないため万引きしてしまう「ティム」が登場する。そして、この作品のタイトルにもあるように「ぼく」は日本人の母とアイルランド人の父を持つ、いわゆる「ハーフ」だ。そして、この「ハーフ」という言葉は一種の差別用語にあたるのではないかとこの作品で示唆されていた。日本では「ハーフ」という言葉は当たり前飛び交っている言葉で差別用語だと思われるなんて私は考えたことがなかった。このことについて無知な自分を恥ずかしく思うと同時に「ハーフ」と言われた当人たちは「自分は半分なんだ」と感じてしまうのも当然だと感じた。現在は「ミックス」や「ダブル」と言うことが主流になってきていると、この作品で学ぶことができた。国際化が色々な国で進められているが、日本は未だに日本人同士で話すことが多く、感覚や考えは似ているが、イギリスのように移民や多国籍が多い国だと、感

覚や考えが違うことが当たり前で、言葉の意味は自分が思っているように伝わるとは限らないと改めて考えることができた。この作品を読んでいなかったら、「ハーフ」という言葉を差別用語と気づかないまま生活していたかもしれないと思うと、無知は怖い状態だと感じた。

また、登場人物たちが通っている「元」底辺中学校は音楽や劇に力を入れたことによって底辺中学校から脱却した一風変わった中学校だった。中学生という多感な時期では、貧しいことを友達に知られることは恥ずかしいと思ったり、自分の弱さを友達に見せることができないのは普通なのに、「弱さ」や「恥ずかしさ」を素直に表現できる登場人物たちが私は印象に残っている。自分が同じ立場だったらプライドが邪魔して、友達の助けや公的な支援さえも拒否してしまうと思ったからだ。だが、「元」底辺中学校が力を入れている音楽や劇というイベントがこの登場人物たちの感情を上手く引き出し、適切な感情の伝え方を学ばせるツールになっていると気づいたときに、座学や言葉では学べない何かがあると感じた。

そして、この作品を読んでいて、一番印象に残ったのは「シンパシー」と「エンパシー」の違いだ。ケンブリッジ大学の英語辞典(Cambridge Dictionary)によるとシンパシーは「同情」「思いやり」であるのに対し、エンパシーは「共感」と書かれていた。また、この言葉について、著者は本作品において「シンパシーのほうはかわいそうな立場の人や問題を抱えた人、自分と似たような意見を持っている人々に対して人間が抱く感情」、エンパシーは「自分と違う理念や信念を持つ人や、別にかわいそうとは思えない立場の人々が何を考えているのだろうと想像する力」と述べていた。この文を見るまでは「思いやり(シンパシー)」と「共感(エンパシー)」の違いを知らず、自分のなかでも曖昧で間違った使い方をしていたのではないかと考えた。「意識しなくても自然に受け取れる感情」と「自ら動いて得られる力」では大きな差があり、多くの人がエンパシーと思っているものはシンパシーだったのではないだろうか。この作品を読むまで私はゼミで学んでいることもあり、「差別」や「多様性」については知っているつもりだった。だが、私がしているのはシンパシーであり、日常生活では差別や偏見には触れない立場から学んでいるということだった。この気づきは自分でもショックだったが、今この瞬間からエンパシーレベル1から始めていこうと思った。

情報社会と言われる現代で、ニュースを見れば「貧富の差広がる」「LGBTQ」「男女差別」などの差別や偏見の種になる見出しの記事を一度は目にする。このような状態で、誰もが差別や偏見に無知・無関心ではいられない。そのときに「知ろうとする気持ち」「相手を理解しようとする努力・想像力」が求められていると思う。この作品を読んで、多くの事に気づき、社会問題は学校という小さい世

界にも大きな影響を与えているし、社会問題を乗り越えていく子どもたちの姿を見習っていきたいと思った。また、私たちがこの作品を通して、見た問題たちは極わずかで、まだまだ私たちが知らないことも多いということを忘れず、いつまでも学べる心を持ち合わせていたい。

1 等

無関心という名の罪

中国語学科 2 年

細谷愛佳

『十字架』 講談社

重松清著

いじめの傍観者は加害者か、それともただの見物人か。私は重松清の『十字架』を読んでそんな疑問を抱いた。

重松清の『十字架』は、いじめをテーマにした物語であり、そのいじめという重いテーマから読者に様々な深い印象を刻み込む。物語は、中学生のフジシユンこと藤井俊介がクラスメイトから明確な理由もなくいじめのターゲットにされ、いじめがだんだんとエスカレートした結果、彼がいじめに耐えられず自ら命を絶ってしまうところから始まる。そして、彼のクラスメイトを始めとする周囲の人達が、その死に対して向き合いながら成長する姿を描く。

いまもどこかで起きているいじめは、歴とした社会問題であろう。本書は、誰もが一度は悩む人間関係の複雑さや社会の冷酷さ、そして、一個人としての言動の責任の重大さについて、読者に再考を迫るものといえる。

著者の重松清は、かつて教師を志したこともあるという。それもあってか、本書は物語を通して、いじめという社会問題に対して鋭い視点で切り込んでおり、いじめの被害者である藤井俊介だけでなく、クラスメイトや両親、教師という、彼の周囲の人々の心情にも焦点を当てて問題の複雑さを読者に伝えている。そうすることで、著者はいじめが一人の問題ではなく、社会全体の問題であることを強調していると、私には感じられた。

作中のクラスメイトや両親、教師らは、おのおのが罪悪感や後悔を覚えている。むしろそれはいじめに対する直接的な加害行為ではないのだが、実は無関心という形で深く関与していた。目の前で行われているいじめを目にしながらも救いの手を差し伸べる者は誰もいない。とりわけ声を上げることのなかったクラスメイトたちが向ける無関心という感情、視線、沈黙は、いじめの被害者である藤井俊介の目にはどう映ったのだろうか。自分の存在は、まるで誰にも見えない

透明人間であるかのように感じられたのではないだろうか。本文中で重松清はいじめの光景について、以下のように描写している。

九月四日の話をする。あの日もフジシユンはいつものように、三島たちにいじめられていた。もう、それはあまりにも当然すぎる光景になっていたから、誰も気にとめることすらなかった。

日常と化したいじめの起こっている教室の風景からは、加害者だけでなく、クラスメイトたちの無関心も、藤井俊介を追い詰める一因となっていたことが読み取れる。同じクラスにありながら、いじめに対して何も行動を起こさなかったクラスメイトたちは、後に自分たちの視線や沈黙が彼を追い詰めたのではないかと苦悩する。彼らは「いじめに加担していないから罪はない」と自分を必死に正当化しようとするが、物語が進むにつれてその無関心こそが最大の罪であることに気づかされる。いじめを傍観することがどれほどの影響を与えるのか、その沈黙がどれだけの重荷となって被害者にのしかかるのかが痛切に描かれているのである。

『十字架』の舞台は中学校である。多感な時期を団体で過ごす点で、いじめが起こりやすいというのは確かにあるであろう。では、大学ではどうだろうか。私たち大学生のあいだでも起こりうる問題なのではないか。大学は中学校や高校とは異なり、年齢や背景が異なる多様な学生が集まる場である。そして、いじめは必ずしも暴力やからかいといったものだけではなく、むしろ排除や孤立、無視といった形で現れることが多い。大学生ともなれば、ある程度いじめについても理解があり、『十字架』に描かれるような最悪のケースを予測できるからこそ、目立ちにくいやり方を取るということも考えられる。

否が応にも団体のなかで過ごさざるを得ない小中高の学校生活、他者と関わりつつも一個人としての自立が要求される社会人生活、言ってみれば大学生活はその過渡期にあたるであろう。中学校のようにクラス全体が一つのコミュニティとして機能するわけではない大学でいじめを目にした場合、どのように対応すべきなのだろうか。

一大学生として本書を読んで得た気づき、それは個々の行動がより重要になるということだ。無関心でいることは、ただの傍観者であることを超えて、同様の罪を犯すことに繋がりがねない。周囲の人々が無関心でいることによって被害者はますます孤立し、精神的な苦痛を増幅させる。言い換えれば、直接的な加

害者にならずとも、被害者にとっては同等か、あるいはそれ以上の重大な問題となりうる。逆説的だが、無関心であることの影響力、これを私たちは決して軽視してはいけない。

『十字架』が読者に与える印象的なメッセージ、それは「無関心は罪である」ということだ。藤井俊介を追い詰めた最大の要因は、周囲の人々が彼の苦しみに対して無関心であったことである。このメッセージは、現代社会においても重要な教訓であると感じた。『十字架』を読めば、いじめの問題に対する理解が深まるだけでなく、人間関係のあり方についても考えさせられる。そして、読者は社会的に自分が抱えていかなければいけない責任についても熟考を迫られる。見て見ぬふりという罪がどれほど重いものか、これが本書のタイトルに込められたメッセージであると、私には感じられた。

いじめは今後も社会的に向き合うべき課題である。とりわけ SNS が広まる現代社会においては、一個人の軽はずみな言動が周囲に与える影響について、誰もがより慎重に発信し、かつ接するべきなのかもしれない。そうした他者との関わり方をわきまえてこそ、人間関係の複雑さも緩和され、他者に思いやりや優しさを持って生きていくべきだという考えに繋がるのだと思う。

最後に私の考えを述べる。私自身にとって、本書はいじめや無関心という問題について深く考えるきっかけとなった。特に、いじめに対して無関心であることが、実はどれほど大きな責任を伴うかという著者のメッセージに深い共感を覚えた。無関心は目に見えない加害行為であり、被害者にとっては沈黙が最も深い傷となり得る。そのため、私たちは単に「自分は加害者ではない」と自己弁護するのではなく、周囲の人々の痛みや孤立に対して敏感でなければならないと思う。

特に大学生という立場においては、日常生活のなかで他者とどう関わるべきか、無関心の態度を取ることがどれほど危険かを改めて考える必要があるだろう。大学は多様な人々が集まる場所であり、一人で過ごすことを好む人も当然いるため、実は孤立している人が目立つことなく埋もれてしまう場合もある。しかし、だからこそ私たちは、いっそう周囲の人々に注意を払い、彼らの困難や葛藤に気づくための努力が求められるのではないか。これはたいへん難しいことかもしれないが、見て見ぬふりは誰かの人生に大きな影響を及ぼし、重大な結果を引き起こすこともあると肝に銘じるべきだろう。

この作品を読んで感じたことを、これからの自分の行動に生かさなければならぬ。他者に対して関心を持ち、心を開き、思いやりを持って接すること、それこそが、社会全体の人間関係を豊かにする第一歩だと思う。読書を通してこの

ような気づきを得たことで、自分自身も少し成長できたように思う。今後も周囲の人たちとより良い関係を築けるよう努めていきたい。

重松清の『十字架』は、繊細な筆致で読む者に大切なことを教えてくれる。一人でも多くの人に手に取ってもらいたいと感じる作品であった。

佳作

人生の終焉で

韓国語学科 3年

永山 琉海

『ひとりで死んでも孤独じゃない 「自立死」 先進国アメリカ』新潮社

矢部武著

自分がいつ死ぬか、考えたことはあるか。誰もが一度は考えたことがあるだろう。病気で死んでしまうかもしれない。事故に遭って死んでしまうかもしれない。はたまた、誰かに殺されて生涯を終えるかもしれない。この世界には、不公平なこと、不平等なものがたくさん存在する。しかし、「死」はすべての生命体に平等に訪れる。私たちはこの世に生まれた瞬間より、「死」から逃れることができない。

私がこの本を図書館で手に取った理由は、いくつもある。それは今の私には結婚願望というものがなく、頼れる兄弟も存在しない。そして自分のコミュニケーション能力がそこまで高くないということに自覚しているため、親がいなくなった後、年老いた時、独り寂しく、誰もいない場所で死ぬのではないだろうかという不安を抱えているからだ。さらに今年、父方の祖母が亡くなったことも理由である。祖母が亡くなった時、私はその場にいた。初めて人が亡くなる瞬間を見たのだ。病室のベッドの横に設置された、心電図のモニターから聴こえてくる心臓が止まったことを表す電子音が、今でも脳裏に焼き付いて忘れられない。初めて身近な人の死を目の当たりにした困惑と悲しみから、現実を受け入れられなかったが、それと同時に、少しホッとしてしまった。不謹慎かもしれないが、「独りで逝くことなく、みんなに囲まれて旅立ってよかったのかもしれない」と感じたのだ。

どんな人間であっても、自らの手で自身の命を絶つ場合以外、私たちに自分の死に方を決めることはできない。自分自身が病死や横死など、想像もしたくないが、「孤独死」もまた、悲しい人生の終幕の形であると考えている。

孤独死とは、誰にも看取られることなく、一人で亡くなることだ。亡くなったあと、誰にも気づいてもらえずに遺体が腐敗していく、深刻な問題である。この本では、そんな「孤独死」について、先進国アメリカの場合を例に取り挙げて記されている。

米国は、1人で生きることを前提とした社会であると同時に、孤立した人々を支援する体制が整っている。本の第二章で、独居者専用住宅のソーシャルワーカーであるノートン氏は、日本での「亡くなった後誰にも気づかれず発見されるのに数週間かかる」といった孤独死の現状について「それは悪夢だ。ここでは居住者の様子をつねに注意して見守り、数日見かけない人がいれば部屋を確認しているので、そのようなことは考えられない。」と語った。

日本には「遺品整理屋」という亡くなった人間の自宅の遺品の整理・処分を専門とする職業があるという。このようなビジネスが存在していることに私たちはもう少し危機感を持つべきだと感じた。以前 SNS で、「隣の家から死臭のようなものがする」という投稿を見かけたことがある。結果としてその投稿主が警察などに調査してもらったところ、隣人の方は亡くなられており、にっおいの原因は遺体の腐敗からによるものだったそうだ。この投稿を見た時、私は他人事ではないなと強く感じた。

よく皆、結婚をして家庭を築けば「周りに老後の世話をしてもらえるから安心」「孤独死の心配はない」という意見を持ち出すが、結婚すれば孤独死の問題はないという考えは、結婚生活がうまくいっている場合に限る話だ。それに、仮に結婚したとしても、相手が自分よりも先に旅立つかもしれない。そうなれば残された側は結局は独りになる。著者は、

米国では独居者専用住宅に住む独居者の孤立を防ぐ支援や、誰にも看取られずに亡くなった路上生活者を追悼する合同メモリアルなどが行われているからこそ、一人で生きることを前提とした社会が成り立ち、独居者は孤立や孤独死の不安をあまり感じないで済んでいるのではないかと思う

と述べた。このように、団体による支援やボランティア活動などを通して高齢者の孤立を防ぐ取り組みが日本でももっと増えていけば、孤独死による悲劇を減らすことができるのではないか。独り寂しく人生を終え、誰にも見つけてもらえず腐り、酷い悪臭を放ちうじ虫などがわいている。そんな現場を片付けなければならない人間がいる。こんな悲しい現状と「社会」は、「政府」は、「私たち」は、もっと向き合うべきだ。

最近では、コロナ禍の影響や、ネットの普及など社会の変化により地域のコミ

ユニティに参加しなかったり、近所付き合いなども減少し、人とのつながりが希薄になっている。「高齢者になるまで生きているか分からないし、他人と交流するのは心身的疲労が伴う。」「結婚なんてできる訳ないし、生涯独身のままだろう。」「人間関係というものはめんどくさいし、知らない人と話すのは苦手だ。」「無理に交流関係を作ろうとしなくてもいいか。」というのがこの本を読む前の私の考えであった。

しかし、「人は一人では生きていけない」という言葉がある。誰かと一緒に暮らさなければいけないという訳ではない。例え独りで生活していたとしても「共通の趣味から仲良くなった友人」「隣に住んでいる人」「仕事場の同僚」など、人とのつながりを持ち続けることが、大切なのだとこの本は教えてくれた。誰かとのつながりがある限り、私たちは「ひとりで死んでも孤独じゃない」のだ。

2024 年度図書委員

心理カウンセリング学科	小野寺 敦子
心理学研究科	奈良 雅之
人間福祉学科（生涯福祉研究科）	六波羅 詩朗
子ども学科	井門 彩織
児童教育学科	小宮山 郁子
メディア学科	原 克彦
社会情報学科	内田 康人
地域社会学科（国際交流研究科）	石井 貫太郎
経営学科（経営学研究科）	竹内 進
英米語学科	ウェルズ リンジー マリー
中国語学科（言語文化研究科）	後藤 裕也
韓国語学科	曹 永宝
日本語・日本語教育学科	鈴木 美穂
歯科衛生学科	鈴木 誠太郎
製菓学科	小田 耕三
ビジネス社会学科	大塚 敬義
新宿図書館館長	石井 貫太郎

2024 年 12 月発行

編集・発行 目白大学新宿図書館